

スポット展示「デーノタメ遺跡が語るもの」

北本市教育委員会文化財保護課 平成 29 年 8 月 15 日発行



図1 6号クルミ塚から出土したクルミ形土製品(第4次調査)

1 クルミとデーノタメ遺跡

平成 20 年度から 21 年度にかけて実施した第 4 次調査は、台地下の低湿地の調査でした。調査区を掘り始めると、水分を多く含んだ泥炭層が厚く堆積していて、そこから多量の縄文土器とクルミの核が出土しました(図 2)。クルミの核というのは、皆さんが殻と認識しているものです。また、出土するクルミの大半はオニグルミで、わずかにヒメグルミを含んでいました。

クルミの核は総量で 1 万点以上が検出されました。その多くは核が半分に割れたものですから、すでに食料として利用された後の残りと考えられます。

クルミの核は調査区のいたるところから出土しますが、とくに集中する地点をクルミ塚といいます。貝を廃棄した場所を「貝塚」と呼ぶように、クルミを廃棄した地点を「クルミ塚」というわけです(図 2)。調査区では 6 か所のクルミ塚が確認され、すべてが縄文時代中期のものでした。

このうち、最も大きな 6 号クルミ塚からは、図 1 のようなクルミ形土製品が出土し

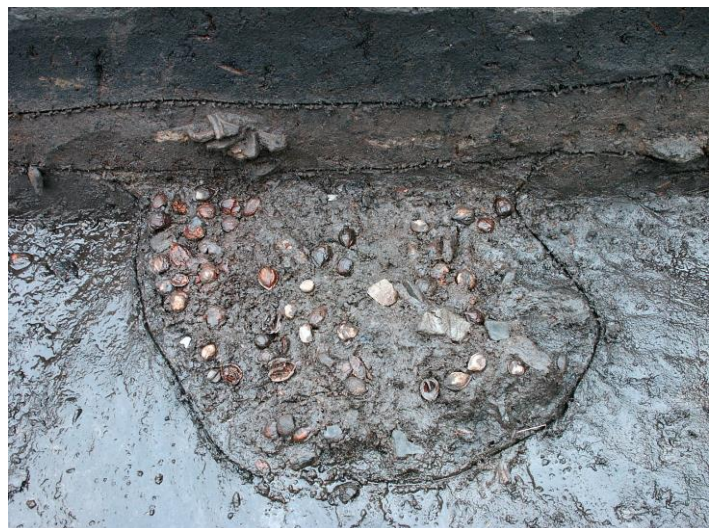


図2 4号クルミ塚のクルミの核

ています。全国的に見ても事例が限られ、大変珍しいものです。大きさは長さ 5.0 cm、幅 4.0 cm、厚さ 2.3 cm で、ちょうどクルミを半分に割った形をイメージした造形のようなのです。

この土製品は日常生活の実用品ではなく、儀礼や呪い（まじない）に利用された「第二の道具」と分類されるものです。縄文人たちは、貴重な食料である大きなクルミがたくさん収穫できるように、この土製品を奉げて神に祈ったのでしょう。



図3 クルミ形土製品の展開写真

2 縄文人のクルミ利用

デーノタメ遺跡では、サンプリングした土壌をもとに各種の科学的分析を行っています。その一つが花粉分析です（図3）。楡井尊氏（埼玉県立自然史博物館）が行った花粉分析の結果によると、デーノタメ遺跡で人々が生活を始めた当初の湿地は、ハンノキ林に覆われていました。ところが瞬く間にクルミ林に置き換わっていくというのです（楡井尊「花粉分析」『デーノタメ遺跡』北本市教委 2017）。

このことから、デーノタメ遺跡の縄文人は、湿地のハンノキ林を伐採し、自分たちの食料として有用なクルミ林へと作り変えていったことがわかるのです。

なお、クルミ塚等から出土するクルミの核は①完全な形のもの、②人が割ったもの、③動物が食べたもの、の3つに分けられ、その大半を②が占めています。図4は縄文時代中期の2号クルミ塚から出土したクルミ核の写真です。中央のクルミ核は上の先端部と下の底部が破損していますが、これは縄文人が石器を使って打撃を加えた痕跡です。また、右側のものは両側に丸い穴が開いていて、アカネズミが食べたものと考えられています。

このようにみえてくると、デーノタメ遺跡の縄文人たちは、集落のある台地を降りた湿地をクルミ林に仕立てます。そして、初秋にはクルミを採集してクルミの核を割り、中身をとった後の核を再び湿地に廃棄し、時にはクルミの豊作を祈って儀礼を行っていたことがわかるのです。

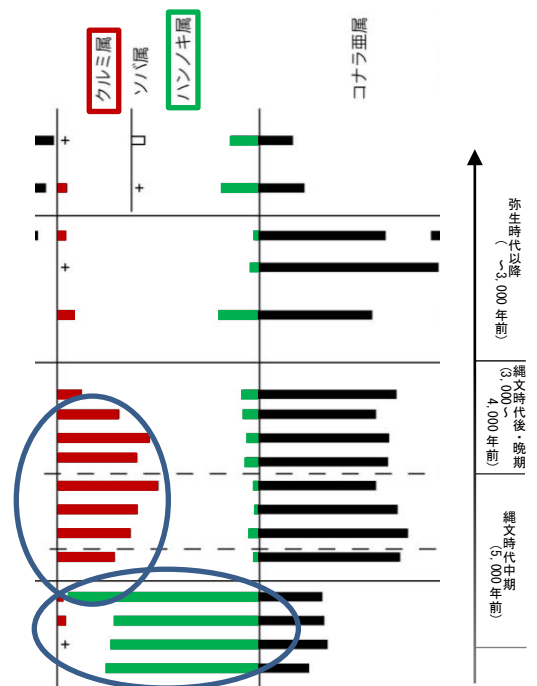


図3 花粉分析の結果(楡井 2017)



図4 2号クルミ塚出土のクルミ核



図5 クルミを加工した石器(くぼみ石・磨石)